

國學院大學學術情報リポジトリ

高等学校英語教科書の変遷をめぐる一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 慶太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000805

高等学校英語教科書の変遷をめぐる一考察

八 木 慶太郎

キーワード

学習指導要領 教科書 リーダー 「リーディング」 「コミュニケーション英語Ⅲ」

1. はじめに

高等学校では現在、学年進行で新しい平成 21 年版の学習指導要領が施行されている。外国語（英語）科（以下、「英語科」と記す）の場合、以前は「オーラル・コミュニケーションⅠ」、「オーラル・コミュニケーションⅡ」、「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「リーディング」、「ライティング」という科目構成であったものが、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」、「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」、「英語会話」という、文字よりも音声、理解（受信）よりも表現（発信）に関わる技能の育成により重点を置いた科目構成となり、リスニングやスピーキングを扱う科目が拡充された。

一方、このような変更によって、文字によるコミュニケーション能力の育成を企図して平成元年版の学習指導要領で設けられた「リーディング」や「ライティング」といった特定の 1 つの技能に特化した科目が消滅した。ライティングに直接関わる科目は、4 技能を総合的に育成することを目指す「コミュニケーション英語」3 科目の他、「英語表現」2 科目もあるのに対して、「リーディング」に直接関わる科目は「コミュニケーション英語」3 科目のみである。それゆえ、「コミュニケーション英語」3 科目の教科書は、4 技能の総合的な育成を視野に入れつつも、リーディングにやや重点を置くものとなることが望ま

れる。

そこで本稿では、新しい教育課程の下でリーディングの教育をどのように構想・展開していくかという課題への対応を検討するための手掛かりを得ることを目的として、これまでのリーディングに関わる教科書の変遷に焦点づけた考察を展開していくこととする。

2. これまでの学習指導要領と教科書の変遷

以降では、これまでの英語科の学習指導要領で設定されてきたリーディング関連の科目の性質に着眼して、①科目が細分化されていなかった時期、②科目の区分原理が対象とする生徒の特性に基づいていた時期、③4技能を総合的に育成する科目と技能別の科目で構成されるようになった時期、④「リーディング」という技能に基づく科目名が初めて冠され、「コミュニケーションの一環としてのリーディング」という、当時としては革新的な考え方が取り入れられるようになった時期、の4期に分けて、それぞれの時期の学習指導要領と教科書をめぐる動向から特に注目に値すると思われる点についての考察を進める。

2.1 科目未分化の時期

この時期の学習指導要領としては、昭和22年版、昭和26年版(いずれも「試案」と昭和31年度版がある。

「試案」は中等教育全般を視野に入れたもので、中学校英語科と一体化された章立てが特徴となっている。昭和22年版では「高等学校における英語指導」という章の中で、昭和26年版では「高等学校における英語指導計画」という章の中でいずれも「読み方」として、学年別に指導法が記されている。前者では、高校1年から高校3年を、第10学年から第12学年というように称して、第10学年では「いろいろな本を読む力をすすめること」、第11学年では「生徒の知識を増してやること」、第12学年では「鑑賞と批判の力を作ってやること」が目的とされている。現在のリーディングの指導目的と一見、かなり異なっているようにも思えるが、これらは、「読むことに主体的に取り組む態度を育てること」、「背景知識を活用しながら読むように指導すること」、「鑑賞を通して読むことの楽しさを実感したり、批判的に文章を読んだりすることができるように指導すること」というように今日的な目的に照らして再解釈することも可能であろう。題材も学年別となっており、第10学年で論文・短い小説・伝記、第11学年で論文・随筆・詩・劇・小説、第12学年で論文・随筆・小説・新聞・雑誌が挙げられており、第10学年では「課外の読みもの」として、ディケンズやストウなどの作品も提示されている。

昭和31年度版では、「読み方の分野」として、物語、伝記、劇、詩、小説、随筆、論文、演説文、英字新聞、英文雑誌などを読むよう指導する旨、記されている。

現在、各教科における新聞活用（NIE）の必要性がクローズアップされているが、このように早くから新聞さらには雑誌をも教材として視野に入れていたことの今日的意義は大きい。しかしながら、当時は現在のように手軽にプリント教材を作成できる複写機やコンピュータが無く、（個々の生徒に購入を求めない限り）新聞や雑誌を教材とすることは困難な状況であったため、実際の授業はやはり、かつての大学英語教育で主流を占めていた文学作品の「講読」授業に近いものとなっていたのではないかと推察される。

戦後の高校英語教科書は昭和24年から使用開始された三省堂の1年生向け「リーダー」（*THE NEW VISTA ENGLISH READERS I*）から始まり、以降2年生向け、3年生向けのリーダーやコンポジション（グラマーと一体化されたものも含まれる）の教科書が続々と刊行されるようになった。科目は未分化であったが、教科書のラインナップとしては後年の技能別の科目構成を既に先取りしていたような様相を呈している。この時期のリーダーの教科書で取り上げられている文章は、やはり文学作品がほとんどであり、各課は本文と文法事項、練習問題程度の極めてシンプルな構成であった。

2.2 「英語A」と「英語B」に大別された時期

学習指導要領は昭和35年版から文部省告示となり、法的拘束力が付与されるようになった。英語は2科目に分割され、各学校の生徒の特性に応じて選択されたいずれかの科目を3年間通して履修するというのがこの時期の基本的なシステムとなった。昭和45年版ではこの2科目の他、さらに「初級英語」と「英語会話」も設けられたが、この時期の教科書の刊行状況から判断すると、大学進学希望の生徒の履修を想定した「英語B」のみを選択した学校の方が実際には多かった模様である。

「英語B」の教科書も、技能別、学年別のラインナップで刊行された。特に昭和35年版では「低学年においては聞くこと、話すことおよび書くことの領域に比較的に重点を置き、高学年に進むに従って、読むことおよび書くことの領域に比較的に重点を置く」と規定されていたこともあってか、リーダーの教科書が最も多く刊行されたが、昭和45年版施行後は専らグラマーのみを扱う教科書（文法事項の解説と練習問題という構成が最も典型的）も多く刊行された。長きにわたり多くの高校で実施されてきた、英語の授業を時間割上「リーダー」と「グラマー」に分ける慣行もこの時期に確立されたものと考えられる。当時は、所謂「平泉・渡部論争」（当時の参議院議員の平泉渉と上智大学教授の渡部昇一による、英語教育のあり方をめぐる論争）の時期でもあり、文法・訳読式の授業に偏重しが

ちな状況への批判も既になされていたが、学習指導要領の規定に無い科目区分でありながら上述のような慣行を想定した教科書の検定が通っていたということは、文法・訳読式の授業の展開上、極めて好都合な実態であったと考えられる。

この時期には、教科書に付属する教師用指導書の内容の充実化も図られた。教師用指導書には、本文の全訳、練習問題の全解答、指導計画や教え方のポイント（例えば、生徒にこのように質問されたらこのように答える、などといったことも含まれる「マニュアル」そのものである）などの他、執筆者の意図や考え方が提示されていることも少なくない。例えば、戦前のリーダーから現在の「コミュニケーション英語Ⅱ」の教科書に至るまで長い歴史を有し、且つ毎年採択冊数も多い点で日本の高校英語教科書の中で最も代表的な存在といえる、三省堂のCROWNの教師用指導書を見ると、「まえがき」で英語学者の中島文雄が次のような英語教育観を展開している（中島1979:iii）。

要するにReaderの授業は、最初に日本語で内容を説明しておいて、次にどうしてその英文がそういう意味になるのか、語法と語義の両方から十分に説明して納得させ、最後に口頭練習をする。従来の訳読式は、文法と辞書とで何とか英文を判読しようとするもので、これでは英語の練習にならないし、英語が本当に分かったことにはならないと思う。

中島もやはり、文法・訳読式の授業には批判的であるが、それに代わる方法として提示していることは、教師による本文の内容や意味の説明と、生徒による本文の口頭練習の域にとどまっており、この限りでは、リーディングをコミュニケーションの一環と捉えるような発想が根本的に欠落していると言わざるを得ない。一方、この教科書のExercisesには英問英答が用意されており、有効に活用されれば、教師と生徒間、あるいは生徒同士が英語で質疑応答を展開するという、現在の学習指導要領で規定されている英語のコミュニケーション活動となり得るが、生徒の英語力や時間的制約などを理由に実際の授業では割愛されてしまった可能性が高いと推察される。

2.3 「英語ⅡB」の時期

昭和53年版からは科目が細分化されるようになり、総合的な科目として「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、技能別の科目として「英語ⅡA」（聞くこと、話すこと）、「英語ⅡB」（読むこと）、「英語ⅡC」（書くこと）という構成になった。読むこと、書くことに特化した科目はこれまで存在していなかったが、教科書は早くから特化した形で刊行されてきたので、漸く実

質的に追認されるようになったということになる。教科書は上述の科目に対応して刊行されたことから、「文法」の「検定」教科書は消滅したが、文部省の検定を受けていない「準」教科書なるものが多くの出版社から刊行され、「英語Ⅰ」の「文法」で使用された。それゆえ、「英語Ⅰ」の教科書は、専ら「リーダー」の教科書として用いられることとなった。

「英語ⅡB」の教科書も依然、伝統的なリーダー型がほとんどであったが、増進堂の *MAINSTREAM* は、いち早くこの時期にパラグラフ・リーディングやフレーズ・リーディングを取り入れた唯一の教科書として特筆に値する。本文のフレーズごとに区切りを入れたり、精読・速読・多読といった目的別に教材を配列したりするなど、現在は珍しくなくなってきたが当時としては斬新な構成が導入されていた。リーダー型の教科書こそが主流であった状況へのアンチテーゼとして、このような新機軸の教科書がいずれは主流になるようにという思いが、この教科書のタイトルに反映されていたものと推察される。

日本で文法・訳読式に代わる有効なリーディング指導の方法論が、英語教育学を専門とする研究者によって本格的に提示されるようになったのは漸くこの時期になってからであり、松村（1984）や高梨・高橋（1987）がこの領域の嚆矢というべき代表的な文献である。この時期にはまだ、タイトルに「リーダー」と銘打った教科書も多くあった一方、「リーディング」と銘打った教科書も次第に増えてきており、「リーディング」という科目が新設される素地が徐々に形成されつつあったことも事実である。

2.4 「リーディング」の時期

平成元年版と平成11年版では、総合的な科目は昭和53年版と同様の構成であったが、技能別の科目の構成に大幅な変更が加えられた。コミュニケーション能力の育成を重視するという方針から、聞くこと・話すことに焦点づけた科目の増強が大きな特徴となっており、前者では「オーラル・コミュニケーションA」、「オーラル・コミュニケーションB」、「オーラル・コミュニケーションC」、後者では「オーラル・コミュニケーションⅠ」、「オーラル・コミュニケーションⅡ」が設けられた。これらに対し、「リーディング」、「ライティング」は両者で共通する科目である。

「リーディング」となってからは伝統的なリーダー型の教科書は漸減していき、タイトルに「リーダー」と銘打った教科書は無くなった。平成元年版が施行開始された頃は、天満（1989）や谷口（1992）のような、認知心理学や言語学などをベースとしたリーディングの平易な概説書や、金谷（1992）のような、リーディングについての実証的な研究を行うための研究入門書の刊行を受け、これらの文献で示された知見に基づく実践や研究に取

り組む高校教員や大学院生も徐々に増えてきた時期でもあった。このような状況から教科書の執筆者には、英米文学や英語学の専攻の大学教員よりも、英語教育学を専攻する大学教員や先進的な英語教育の実践に取り組む現職の高校教員が加わることが多くなり、そのようなバックグラウンドを有する執筆者の日常的な研究や実践の成果が教科書に直接反映されるようになってきた。教材の出典に文学作品が占めることも少なくなり、大学英語教科書、海外出版社の英語教材、ノンフィクションの英書などが出典の欄に記載されることが多くなった。

以上のような変化もさることながら、これまでの教科書と異なる最も大きな変化は、読む目的や語数、難易度などを基準とした教材配列によって、リーディング・ストラテジーの習得を企図した教科書が増えてきたことである。平成10年版の施行前後の時期には通常の課とは別にコーナーが設けられ、実例に基づく明示的な説明と、習熟のための練習問題が配置された教科書が主流となった。三省堂の *CROWN* や、それと同様に長らく採択冊数上位を誇り、典型的なリーダー型の教科書と目されてきた文英堂の *UNICORN* でさえも、この時期には、リーディング・スキルのコーナーが設けられるようになり、これらの教科書が長らく有してきた「リーダー」としてそれ自体が読み物ともなるという良さはなるべく保持しつつ、今日的なリーディングの技能の習得にも資するような構成に変貌を遂げたことは、この時期のリーディング教育をめぐる上述のような状況を如実に反映している点で極めて象徴的である。この時期の主要なリーディング教育関連文献としては、高梨・卯城(2000)、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(2002)、野呂・氏木(2010)などがあげられる。

現在は基本的に平成21年版の新学習指導要領に基づく教育課程に移行しているが、平成11年版の学習指導要領に基づく教育課程も通信制高校などでは存続しているため、「リーディング」の教科書も数種類は暫く存続する見通しである。

3. 新学習指導要領における「読むことを中心とした活動」の扱いと教科書

これまでの「リーディング」も、読むことのみ言語活動が狭く限定されていた訳ではなく、他の技能への展開が想定された言語活動として「まとまりのある文章を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えなどをまとめたり、伝えたりする」や「物語文などを読んで、その感想を話したり、書いたりする」というようなものも既に含まれていたのだが、新学習指導要領では技能統合的な指導をさらに拡充・強化することが企図され、「4技能を総合的に育成することをねらいとして内容を構成し、統合的な活動

が行われるようにすること」をねらう「コミュニケーション英語Ⅰ」とその基礎の上に配置される「コミュニケーション英語Ⅱ」、さらにその基礎の上に配置される「コミュニケーション英語Ⅲ」の3科目で「読むことを中心とした活動」が行われる。

「コミュニケーション英語Ⅰ」では、「説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する」となっているが、解説の部分で「読んだ内容について、賛成や反対などの意見を述べたり、簡単な感想を述べたりするような活動も併せて行うことが大切である」となっている。また、このような言語活動を効果的に行うために、指導上配慮する事項として3項目があげられているが、そのうち特に「内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること」と「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること」が「読むことを中心とした活動」に関わるものとしてあげられている。

「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」では、「説明、評論、物語、随筆などについて、速読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う」となっている。この科目も、言語活動を効果的に行うために、指導上配慮する事項として3項目があげられているが、そのうち特に「論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりすること」と「未知の語の意味を推測したり、背景となる知識を活用したりしながら聞いたり読んだりすること」が「読むことを中心とした活動」に関わるものとしてあげられている。

八木(2011)では、執筆当時まだ新学習指導要領に基づく教科書が刊行されていなかったこともあり、「コミュニケーション英語」3科目の教科書にも近年の「リーディング」における、リーディングに特化した科目ならではの教科書の特徴が今後も継承されるのかという点についての懸念を示していたが、現在は既に使用開始となった「コミュニケーション英語Ⅰ」と「コミュニケーション英語Ⅱ」の教科書や、まだ使用は開始されていないが各自治体の教科書センター(図書館など)では実物を閲覧できるようになった「コミュニケーション英語Ⅲ」の教科書を通覧したところ、特に「コミュニケーション英語Ⅲ」でリーディング・ストラテジーを基軸に据えて、旧科目の「リーディング」を実質的に継承しようとしている教科書が多いことが判明した。また、「コミュニケーション英語Ⅰ」や「コミュニケーション英語Ⅱ」でもリーディング・ストラテジーを取り上げている教科書は多く、リーディング面が手薄にならないようにするための方策は概ね講じられているように見受けられる。

また、「コミュニケーション英語Ⅰ」で言語活動を効果的に行うために、指導上配慮す

る事項として示されていた「内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること」を重視して、「談話標識」や「ディスコース・マーカー」といった「つながりを示す語句」を表す専門用語をそのまま用いて（「談話」や「ディスコース」とは何かという解説抜きで）その類型や用法の解説を行っている教科書が多く見受けられた。これはコミュニケーション活動に際しては談話の流れの理解が重要となるということに鑑みた結果であろうが、最近の英語学における談話標識研究の成果の英語教育への応用が図られるようになってきたということを示すものでもあろう。

4. おわりに

日本の英語教育は、これまでは文法・訳読式の教授法による授業が主流を占めてきたこともあり、高校の教科書も「リーダー（読本）」型のものが長年最も多く用いられてきたが、最近の教科書は「リーダー」としての機能よりも、「英語を実践的に活用するための手引書」としての機能の方により重点が置かれるようになってきている。1980年代頃までの教科書は、各課に執筆者が選定した教材（主に文学作品）と定型的な練習問題（内容についての英問英答のように英語での思考や表現を求められる問題を除くと、多肢選択問題、正誤問題、空所補充問題、和訳・英訳問題など、文法・訳読式、あるいは大学入試対策の授業には適している）、コミュニケーション活動を想定したタスクとは言い難いものが多い）、巻末に文法事項の簡単なまとめや語彙リストが載る程度であったが、最近の教科書はビジュアル化が進み、フルカラー化、大判化、絵・図表・写真の多用、頁単位でのレイアウトの工夫、メインの課以外のコーナー・コラムなどの充実化、文法事項の丁寧で分かりやすい説明の工夫など至れり尽くせりの紙面構成がほぼ共通の特徴となってきているからである。古くから教育界では、教師の教科書に対するスタンスの違いを表すときに、「教科書を教える」と「教科書で教える」という言い回しが用いられてきたが、説明が最小限に簡素化されていて、あまり明示的に何かを教えてくれる訳ではない（教材に含まれる教育的な価値を、訳読を通して教師が教える必要があった）以前の教科書は前者、文法事項から英語の実践的な活用のための技法（リーディングの場合は、「リーディング・ストラテジー」が該当する）に至るまで説明が丁寧な最近の教科書は後者に適したものとなっているようである。

近年の「リーディング」の教科書もまた、「手引書」的な体裁のもものがほとんど全てを占めるようになっていたが、（他の技能への展開を図る活動も含まれているものの）リーディングに特化した科目であったので、パラグラフ・リーディングやフレーズ・リーディ

ングなどに関わるリーディング・ストラテジーの説明やその習熟のための練習問題に多くの紙面を割くことができていた。また文学作品の教材をメインの課とは別枠で配置する(例えば Supplementary Reading というような位置づけとする)などして、以前ほどではないが「リーダー」としての機能を持たせた教科書もあった。

新しい学習指導要領では4技能の総合的な育成を目指す科目が増えた結果、「リーディング」は廃止されることになった。それによってリーディングに関わる教育が手薄になることも懸念されるが、特に「コミュニケーション英語Ⅲ」で旧科目の「リーディング」を継承しようとしている教科書が多いことが判明した。この科目を、4技能の総合的な育成を視野に入れつつもリーディングにやや重点を置く科目として位置づけ、リーディングに限定されない名称の科目となったことを踏まえて他の技能との統合度を高めたコミュニケーション活動を多く取り入れるようにすることが、今後の高等学校での新しいリーディング教育のあり方となるのだろう。

新しい教育課程の下でリーディングの教育をどのように構想・展開していくかという課題への対応を検討するための手掛かりを得ることを目的として、本稿ではこれまでの教科書の変遷に焦点づけた考察を行った。今後は「コミュニケーション英語」3科目の教科書の内容を詳細に分析することが必要と考えている。また、現職教員を対象とした調査の実施などを今後の研究課題として視野に入れるようにしたい。

参考文献

- 門田修平・野呂忠司・氏木道人 (2010) 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
- 金谷憲 (1995) 『英語リーディング論：読解力・読解指導を科学する』河源社
- 国立教育研究所内戦後教育改革資料研究会 (1980) 『文部省学習指導要領 [19] 外国語科編 (1)』日本図書センター
- 国立教育研究所内戦後教育改革資料研究会 (1980) 『文部省学習指導要領 [20] 外国語科編 (2)』日本図書センター
- 高梨庸雄・高橋正夫著 (1987) 『英語リーディング指導の基礎』研究社出版
- 高梨庸雄・卯城祐司編 (2000) 『英語リーディング事典』研究社出版
- 谷口賢一郎 (1992) 『英語のニューリーディング』大修館書店
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ (2002) 『英文読解のプロセスと指導』大修館書店
- 天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』大修館書店
- 中島文雄 (1979) *THE CROWN ENGLISH READERS Third Edition Book One : TEACHER'S MANUAL*
三省堂

松村幹男(1984)『英語のリーディング』大修館書店

文部省(1961)『高等学校学習指導要領 外国語編』大蔵省印刷局

文部省(1970)『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局

文部省(1979)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』一橋出版

文部省(1989)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』教育出版

文部省(1999)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』開隆堂出版

文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』

[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2010/01/29/1282000_9.](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf)

pdf(最終確認:2014年9月14日)

八木慶太郎(2011)「英語教育における言語力の育成」『國學院大學紀要』第49巻 pp.117-130.